



【フロウ】 Flow



福島県奥会津の暮らしに息づく伝統文化は、只見川・伊南川とその支流に集約される豊かな水の流れの中で育まれてきました。Flowは、奥会津の宝である「豊かな自然・伝統文化・ここで生きる人」を、皆さんと見つけていく情報紙です。

奥会津をつなぐ人々

尾瀬の自然とそこに生きる人たちに魅了され、
福岡県から移住してきた小山抄子さん。
食害を防ぐために駆除される鹿の命を無駄にせず、
大切に使用したい。
彼女の想いに共感した人の輪が広がり、
新しいものづくりが生まれている。



Okuetsu news Flow

人と人をつなぎ、届ける
鹿革に込めた命への想い

駆除・廃棄される尾瀬の鹿
その現実に抱いた疑問

青、白、ピンク、茶色…。カラフルな革はしなやかでやわらかく、手にしつくりと馴染む。心地よい風合いのこの革は鹿の皮をなめし、染色したものだ。ここからポーチ、財布、スニーカーなどに形を変え、多くの人の暮らしを彩っている。「奥会津と北海道で捕獲された鹿の皮を猟師さんからいただいで使っています」。そう話すのは、南会津町の名木「古町の大イチョウ」近くに工房を構える小山抄子さんだ。

小山さんは福岡県出身。大好きな自然と動物の写真を撮りたくて1993年、尾瀬沼ビジターセンターでアルバイトをした。そこで出会った人たちの温かい人柄と尾瀬沼の周囲に広がる原生の森に魅了され、2006年から再び尾瀬で働き始めた。そしてある変化に気がつく。鹿が増え始めていたのだ。

「最初に尾瀬に来たときは鹿の姿を見ることはほとんどなく、遠くで鳴き声が聞こえるくらいでした。2006年にはすでに鹿が湿原に入り始めていて、それからどんどん増えていったんです」。ミツガシワやニッコウキスゲなど鹿が好んで食べる植物が激減し、2010年ごろから害獣として「駆除」が始まった。

駆除された鹿はすべて廃棄される。その現実を目の当たりにした小山さんは、「命をもらって抱いて捨てるのはなぜ？」と疑問を抱いたと振り返る。「命をもらうなら、その後にも責任を負うべきではないか。捨てるに使うことはできないかと思っただけです」



Flow
雑記帳

<https://www.okuetsu100.jp/flow/>



鹿皮に新たな命を吹き込んだ たくさんの人との出会い

尾瀬以外の奥会津でも食害が深刻化し、駆除される鹿が年々増えていた2014年。東京のなめし工場を見学する機会があり、小山さんは初めて触れた鹿革のやわらかさに感動する。「こんなにいいものなら使いたい」。早速行動に移し、知り合いの猟師さんたちに8頭分の鹿皮をもらってなめした。そこに幸運な出会いが訪れる。「南会津の花弁農家で猟師の月田禮次郎さんに相談に行ったら、たまたま横浜にある特別支援学校の革工課の加藤博夫先生が遊びに来ていて協力してくださるようになりました」



猟師さんからもらった鹿皮に付着している肉や脂を銃(せん)という刃物でこそげ落とす。「命をいただいている」ことを改めて感じる時間でもある



かわいらしい鹿革製品は檜枝岐村の『山人家(やも一どや)』、尾瀬の『長蔵小屋』『鳩待山荘』などのほか、南会津町のオンラインショップ「iimonoショップ」でも購入できる

おぜしかプロジェクト

住所: 南会津町古町字中川原50
✉ ozeshikakoyama@gmail.com
定休日: 不定休
※仕入れなどで長期不在になることもあるため事前連絡を



<https://www.facebook.com/Dear.ozedeer/>

いま作っているのは、檜枝岐村の曲げ輪職人・城健史さんとコラボした打楽器のハンドドラムだ。「今後はこういうコラボで、奥会津ならではのゆるいものを作りたいですね。奥会津だけじゃなく地域を超えてもいい。そして、それを作ってくれる人が増えたら一番いいかな」。いただいた命に責任を持ち、大切に使う。小山さんの想いが多くの人を結び、大きな輪となって広がっている。



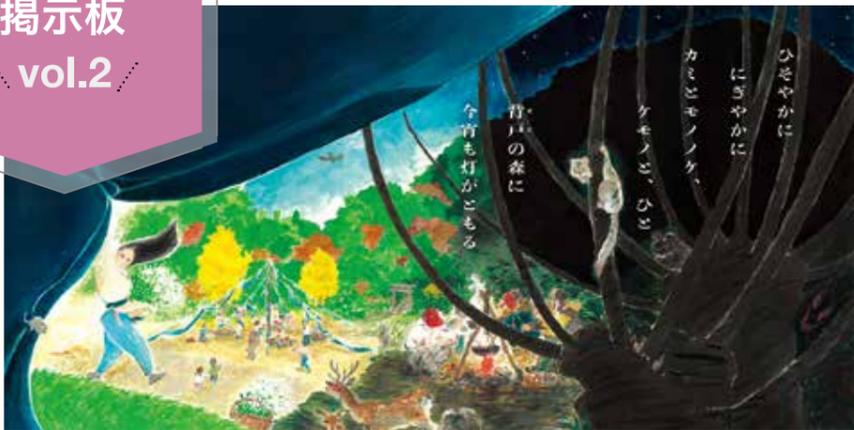
小山抄子さん

福岡県出身。1993年に尾瀬沼ビジターセンターでアルバイト。2006年から再び尾瀬で働き始め、2008年に南会津町に移住。2015年に「おぜしかプロジェクト」を立ち上げ、奥会津などで捕獲された鹿革を使った製品の製造・販売、ワークショップなどを行っている



ただでん 掲示板 vol.2

只見川電源流域振興協議会からのお知らせ



奥会津体験博覧会せど森の宴 地域の皆さんが主役となる事業

本事業は通り一遍の観光では触れることのできない、奥会津地域に暮らす人々が持つ互いに助け合う「結の精神」に触れることができるような内容になっています。行政や一部の観光事業者だけでなく、ここに暮らす皆さんひとりひとりに、自分の身の回りにある当たり前のものを活かして体験プログラムを作ってもらい、参加者に対して提供することで地域の魅力発信を行います。気兼ねなく遠方へ出かけられない今だからこそ、自町村、近隣町村を見つめ直してみませんか？

福島県民限定

本年度は新型コロナウイルス感染症対策を十分に取り、**10月1日から予約開始、10月30日から開催予定**です。詳しくはせど森の宴公式HPや本事業のFacebookアカウントでご確認ください。



せど森の宴公式HP



Facebook

予定しているプログラム



草木染めのからむし繊維を扱う草縄プレスレット作り



小山さんによる会津の鹿革を使ったマイスケットカバー作り&鹿肉メシ



奥会津の大地が育てた稲ワラとスゲでワラつとから作る天然納豆

新しい仲間が増えました！

MICHIKO TAKAMI

奥会津地域おこし協力隊

今年の9月に奥会津地域おこし協力隊に着任いたしました高見美知子です。温暖な岡山県倉敷市出身のため、雪国の暮らしは初体験なので楽しみにして来ました。地元の人との交流や地域文化、風習、伝統、歴史など、自らの体験を通して得た感動や奥会津の魅力をSNSなどで発信していきたいと思っています。皆様、ご指導よろしくお願いします。



たかみ みちこ
高見 美知子

編集問合せ先

新・奥会津だより「Flow」編集部(株式会社日進堂印刷所内)
〒960-2194 福島市庄野字柿場1-1
TEL:090-6852-0953(専用電話) FAX:024-594-2041
Eメール:flow@nisshindo.co.jp

ご意見・ご感想をお寄せください。奥会津だよりの定期購読を希望される方は、編集部まで、発送先(ご住所・お名前)をお知らせください。個人情報の取扱いにつきましては適切に管理を行っています。詳しくは、日進堂印刷所のホームページをご覧ください。



自然の中に暮らすいとみな、100年先のみらいへ。



最新情報はホームページでご確認ください。

只見川電源流域振興協議会 事務局

〒968-0006 福島県大沼郡金山町大字中川字上居平933番地
東北電力奥会津水力館「みお里」奥会津振興センター内
TEL:0241-42-7125 FAX:0241-42-7127
Eメール:tdrsk@okuizu.net

只見川電源流域振興協議会の主催・共催事業については、最新情報をホームページで随時公開しています。この冊子は電源立地地域対策交付金の事業より作成されています。



奥会津の 美術館 資料館

QUIZ

ただみ・ブナと川の
ミュージアムからの
クイズです！

只見町の哺乳類の中でも最大級のツキノワグマが多いことは、自然の豊かさや生物多様性の証です。館内にもツキノワグマの剥製がたくさん展示されていますが、いったい何頭分あるのでしょうか。

答えを知りたい方は
ただみ・ブナと川の
ミュージアムへ

Go!



指導員・太田祥作さん



DATE

ただみ・ブナと川の
ミュージアム

詳しくはこちらから



只見町大字只見字町下2590
TEL:0241-72-8355
開館時間:9:00-17:00
休館日:火曜日
(祝日の場合は翌平日)、
年末年始
入館料:高校生以上310円、
小・中学生210円

ただみ・ブナと川のミュージアム 只見の森の豊かさを実感できる、多彩な展示が魅力



猛禽類のクマタカや夏鳥などの剥製が並ぶ

ブナ林と川が育む自然を再現。鳥や動物たちの剥製も見どころ

只見の森はこんなにも豊かで多様なのか。只見川河畔に建つ『ただみ・ブナと川のミュージアム』を見学して驚いた。メイン展示室のパノラマシアターには、さまざまな動植物が生息するブナ林や溪流、水辺林などの自然が再現されている。大きな水槽にニッコウイワナが泳ぎ、昆虫の標本や鳥類、哺乳類の剥製がずらりと並ぶ様は壮観だ。「ブナ林の下(林床)に咲いている赤い花はユキツバキ。多雪気候に適応した植物で、枝がしなやかなので重い雪の下でも折れにくいんです」と指導員の太田祥作さんが解説する。町内で確認された哺乳類は37種。鳥類は141種で、アカショウビンやブッポウソウなどの希少種を含む夏鳥が多いことが特徴だそう。剥製のネームプレートにあるQRコードをスマホで読み込むと、「キョロキョロ」「ゲツゲツ」とそれぞれに個性的な鳴き声を聞けるのも楽しい。太田さんによると、只見には生態系の頂点に立つ絶滅危惧種の猛禽類クマタカや大型哺乳類のツキノワグマも「かなりの高密度で」生息しているというから凄い一言だ。

ブナを食べて生きる昆虫たちが教えてくれる、森の奥深さ

2階のギャラリーでは11月29日(月)まで企画展「只見のブナ林の昆虫」を開催している。「生の木や腐った木の幹や枝、葉っぱ、種子、腐った木に生えるキノコなど、いろんな昆虫がブナのいるんなところを食べています」と太田さん。新緑の頃に現れてブナの新芽をかじるユキグニコルリクワガタは、その名のとおりの光沢のある瑠璃色の体の特徴。生のブナの幹や枝しか食べないヨコヤマヒゲナガカミキリは珍しく、昆虫マニアの間で人気なんだとか。無数の小さな昆虫たちの存在が、多様な生き物を育む只見のブナの森の豊かさを教えてくれる。企画展に合わせ、専門家による講座が10月23日(土)に開催される予定だ。

館内にはほかにも豪雪地帯ならではの「雪食地形」、日本と世界のブナの違い、2014年に登録されたユネスコエコパークについての展示、自然とともに生きてきた只見の人々の暮らしや伝統文化の紹介など見どころがたくさんある。ぜひ時間を取ってゆっくり見学したい。



只見は昆虫の宝庫。美しい標本に見入ってしまう



只見町河井継之助記念館

詳しくはこちらから



義のために戦い、只見で没した長岡藩家老・河井継之助の資料や逝去した部屋を移設展示してある。河井は、戊辰戦争時に中立の立場をとって、新政府軍・旧幕府軍の両者を和解させようと尽力した。

只見町大字塩沢字上ノ台850-5
TEL:0241-82-2870
開館時間:10:00-16:00
休館日:木曜日、荒天日、
臨時休館日あり
入館料:大人350円、小人200円



旧長谷部家住宅(叶津番所)

詳しくはこちらから



戦国時代から続く会津と越後を結ぶ八十里越の番所跡で福島県指定重要文化財に指定されている。当時の人々が往来する姿を偲ぶことができる。

只見町大字叶津字居平456
TEL:0241-71-8218
開館時間:10:00-16:00
休館日:月曜日
(祝祭日の場合は翌日)
入館料:無料



前沢集落曲家資料館

詳しくはこちらから



中世の会津武士が拓いたとされる集落で、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。茅葺屋根や中門造り(曲家)、人々の暮らしの様子を見学できる。

南会津町前沢337
TEL:0241-72-8977
(開園期間のみ)
開館時間:8:30-16:30
休館日:シーズン中定休日なし
入館料:大人300円
高校生以下150円



尾瀬写真美術館

詳しくはこちらから



尾瀬を愛した写真家・白旗史朗氏の作品を取めた美術館。迫力ある写真からは四季折々の尾瀬の表情だけでなく、自然と一体化する気分を味わうことができる。

檜枝岐村字左通124-6
(ミニ尾瀬公園内)
TEL:0241-75-2065
開館時間:9:00-17:00
入館料:2021年8月1日~
11月3日まで無料、通常は有料
4月~8月 大人500円、子供200円
9月~11月 大人200円、子供100円
(ミニ尾瀬公園入園料を含む)



尾瀬書美術館「思郷館」

詳しくはこちらから



福島県二本松市出身の書家・丹治思郷氏の作品を取めた美術館。心を注いだ書を大自然の中で、ゆったりと鑑賞することができる。

檜枝岐村字左通124-6
(ミニ尾瀬公園内)
TEL:0241-75-2065
開館時間:9:00-17:00
入館料:2021年8月1日~
11月3日まで無料、通常は有料
4月~8月 大人500円、子供200円
9月~11月 大人200円、子供100円
(ミニ尾瀬公園入園料を含む)

アイコンの見方



美術館



博物館



資料館



記念館



展示館、展示場



歴史的建築物や史跡等



冬季休業

令和の奥会津風土記 ～むらをあらく～ 昭和村編

会津学研究会 菅家 博昭

菅家博昭 プロフィール

1959年生まれ、昭和村在住、花農家。会津学研究会代表、昭和村文化財保護審議会委員長を務めるなど、会津地域を中心に調査を続けている。著作に『芋(からむし)～地域資源を活かす生活芸双書』『暮らしと繊維植物』など。

村境にある神々を訪ねて

～通称「どうろくじん(さいのかみ、道祖神、道陸神)」を中心に～

縄文人の生活のあと

① 今年2回目の村歩きは大沼郡昭和村の上昭和地区。かつての大芦村域である。

集合場所は佐倉の道の駅からむし織の里しようわ。併設されているからむし工芸博物館の北の畑に、世界のカラムシ64品種が展示されており無料で見学できる。



からむし工芸博物館・世界の芋麻園



奥会津昭和の森キャンプ場で行程説明

② 小矢ノ原(かつては小屋の原と表記)の奥会津昭和の森キャンプ場駐車場から歩いて国道沿いに出ると、整備された顕彰碑群のなかに会津藩戦死者2名の供養墓もある。



顕彰碑群の周囲は美しく整備されている 会津藩戦死二人之墓

③ 近くのカラムシ圃場を右手に見ながら旧道を歩いて、現在工事中の国道401号線の脇に出る。縄文時代の落とし穴遺構が確認された大芦中坪A遺跡である。



窪地が「大芦中坪A遺跡」

2017年の発掘調査で12基の土坑が確認され、2種類の落とし穴遺構であることがわかった。土坑の最下部に残された木炭片の科学分析では、クリ(約5300年前、縄文時代中期前半)とコナラ(約5500年前、縄文時代前期末～中期前半)と確認された(報告書、2018年)。

また、年代は沼沢火山の噴火前後となっており、5月



に三島町大谷で確認された埋木(約5400年前)とも近接しており、遺跡の意味を考えるうえで興味深い。この旧道には庚申塔石碑群、馬頭観音石碑群が見られる。



旧道沿いの庚申塔石碑群

大芦の遺跡の北側に、大きなアカマツ等が植えられ、どうろくじん2体が小さな木造建屋の中に安置され、室内には穴をあけた木製椀蓋類が奉納されている。「お椀のふたに穴をあけ、ひもを通していくつもつるしてあるが、耳の神様にもなっているようである」「昔、大芦に大火があった時、この道祖神が祠から出て火を消して下さったという。その足跡が残る平らな石がすぐ前にある」(馬場勇伍『昭和村の石造遺産』1992年)。



集落の目印になったであろう赤松の傍りに安置された、2体のどうろくじん

堂を囲みながら皆で議論になったのだが、左側の像体は子どもを抱いており、子安観音のようである。右側は錫杖(※)を持った手の形をしている。先述の馬場氏も同様の見立てをしており、いくつかの由来の異なる石造をここに寄せた可能性もうかがえる(かつて大芦に寺があったが江戸時代に廃寺となっている)。

※錫杖:修験者が持ち歩く杖で、杖の先にすず製の輪がついているもの。

子どもを抱いたどうろくじん(左)と錫杖を持つ手のどうろくじん(右)



人々の願いとどうろくじん

④ 会津田島に向かう国道400号線、舟鼻峠の入り口のスノーシェルター近くに、両原の「庚供養」石塔(享保12年(1727))と、双体道祖神石像、一里塚と思われる小さなマウンドがある。似た像の道祖神は小野川(安永2年(1773))と、佐倉(記録なし)にもある。



双体道祖神と庚申塔

双体道祖神には小石が捧げられている

⑤ 小学校が新しい観光名所となっている喰丸地区。旧喰丸小学校の校庭には、シンボルともいえる2本のイチヨウの樹、ネムノキ等があり、とりわけ紅葉が美しい。この旧喰丸小学校では、村民によるチャレンジショップ「よいやれや」が行われている。



⑥ 『新編会津風土記』(1809年)から、200年前の喰丸村を見てみると、「家数33軒、喰丸峠、内川(現在の野尻川)に架橋が2ある。曹洞宗の仏森山延命寺がある。熊野宮には稲荷神2、三島神、鹿島神が相殿し石鳥居がある。山神社があり鳥居がある。幸神社があり勧請年は不明で村民持ち(所有)である」としている。

「幸神社」とは「さいのかみ」のことである。会津藩撰の記録書にこのように記載されるのはたいへん珍しい。各村からの書き上げをもとに編纂されたと言われているので、音を取り漢字を当てたように考えられる(白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』思文閣出版、2004年)。

最後にこの「幸神社」を視察した。地元では「道祖さま」と呼んでいるという。

木造の堂宇があり、現在も信仰を集めていることがわかる。



幸神社

堂内の道祖さま

裏手には在り植物の「ぼんばな(花笠菊)」が1株叢生しており、長い間管理されていることがわかる。黄色の花は盆に墓地に飾られる。



境内の石祠(弘化4末(1847))

盆近くには黄色い花をつける花笠菊

昭和村では、集落の安寧を祈る作法が、今も生きている。

写真:菅 敬浩・須田雅子
次は檜枝岐村・南会津町を歩く。